

テシマウは本当に完了のアスペクト形式なのか

中谷健太郎

要旨

自然言語の意味の分析に自然言語をメタ言語として採用することの問題点として、自然言語の曖昧性に起因する用語の定義の曖昧性や循環性、そして構成性の分析の欠如があることを、補助動詞表現テシマウの代表的な先行研究を例として指摘する。その上で、形式言語を使った分析の必要性を主張する。代替案では、Nakatani (2013)などに従い、テシマウを-te と simaw に分解したうえで、前者が事象の先行性を指定する機能語であり、後者は事象化した主題をアクセス不能な空間=BOX に入れるという事象を指示する（広い意味での）内容語であると主張した。事象を導入するという点で-te simaw は純粋な機能語としてのアスペクト標識ではなく、それ自体語彙アスペクトを有する語彙項目とした。シチャウとシテシマウの違いについても、BOX の定義を修正するだけでおおよそ説明できると主張し、形式的な分析をする利点とした。

1. メタ言語に自然言語を使った先行研究

日本語で書かれた伝統的な日本語学の研究ではメタ言語に日本語を用いることが多いようであり、補助動詞表現であるテシマウについても同様である。本節ではまず、日本語で書かれたテシマウについてのいくつかの代表的な先行研究を例示して、自然言語をメタ言語として用いることの潜在的問題点を指摘したい。

1.1. 用語の定義の曖昧性と循環性

先行研究での代表的なテシマウの意味分析を検証してみよう。

- (1) 「完了とは、或る事実が完了して、存在することをいふ」 (松尾(1936: 664))
- (2) 「私の考えでは、この、「——た」という形、「——ている」という形、「——てしまう」という形は、それぞれ全くちがった意義を表わすものだと思う。即ち、まず、(iii)の「消えてしまう」は「完全に『消失』という作用が行われる」という意味である。「てしまう」は、**作用が行われることを表わす**言い方である。他の言葉に例をとれば、「降る」とか「積る」とかいうのと同じ性格のもので、てっとり早く言えば「する」の一種である。次に(ii)の、「積っている」は、「以前に『積雪』という作用が行われた、その結果がまだ存続している状態にある」という意味で、即ち、「ている」は、**あるものがある状態にあることを表わす**言い方である。つまり、「降りそうだ」とか、「雪らしい」とかいうのと同じ性格のもので、てっとり早く言えば「ある」の一種である。この二つは全く種類のちがったもので、(iii)の「消えてしまう」の意味は「——ある」の形で言い表わすことはできず、逆に(ii)の「積っている」の意味を「——する」の形で言い表わすこともできない。また、(i)の「降った」は、『積雪』という作用が完了した」という意味を表わす、という以外には説明しようのない

もので、これまた、「——する」とも「——ある」とも言い換えられないもの、「状態にあることを表わす」とも言えず、「作用が行われることを表わす」とも言えず、これこそ、「完了を表わす」としか言えないものである。」 (金田一(1955/1976: 29-30); 太字も金田一のもの)

- (3) a. 「——た」は「作用が完了した」という意味を表わすという以外には説明しようがない
b. 「——ている」は「あるものがある状態にある」ことを表わし、「ある」の一種である
c. 「——てしまう」は「作用が行われる」ことを表わし、「する」の一種である
- (4) 「これは「ある動作・作用が完全に行われる」つまり「完了する」という意味をもつ。即ち「消えてしまう」は「消え終る」と言い換えられる。「完了する」であるから「ある」の一種ではなくて「する」の一種であること明らかである。これを「完了」を意味するからといって「完了態」と呼ぶ人があるが、§4にのべた「——た」の形とは明らかに別のものであるから、特に「終結態」と呼ぶことにしたい (金田一(1955/1976: 48); 太字も金田一のもの)
- (5) 「雪が降った」の「——た」は [...]「ある動作なり作用なりが、すでに実現済みだ」という事態を表わす形である。これを「完了態」と呼ぼうと思う (金田一 1955/1976: 34)
- (6) 「終結態は、上に述べたように「する」の一種である。つまり動作・作用を表わす語句である。動作・作用を表わす語句であるから、§2に述べたように、過去態とか現在態とかいう別はないわけである。その代りに、§4に述べたように、完了態・不完了態の別があるわけである。例えば、「消えてしまう」「読んでしまう」は不完了の終結態であり、「消えてしまった」「読んでしまった」は完了の終結態である (金田一(1955/1976: 29-30); 太字も金田一のもの)
- (7) 高橋(1969/1976: 131)
- a. [終了] うごきがおわりまでおこなわれることをあらわす
e.g., 「電燈がみんなきえてしまった」
- b. [実現] 過程のおわりとしておこなわれる動作が実現する
e.g., 「たいがいは死んでしまう」
- c. [期待外] 予期しなかったとと、よくないととが実現することをあらわす e.g., 「おもわず笑いだしてしまった」
- (8) 吉川(1973/1976: 228ff) [動作の完了] ある過程を持つ動作がおしまいまで行なわれることをあらわす e.g., 「梨をみつつも食べてしまう」
- a. [積極的動作による完結] 積極的に動作に取り組み、これをかたづけることをあらわす e.g., 「木を切ってしまう」
- b. [消極的動作による完結] ある動作・作用が行なわれた結果の取りかえしが見つからないという気持ちをあらわす e.g., 「ぼったりとたおれてしまいました」
- b-i. [無意識的動作] 動作が無意識的に行なわれることをあらわす
e.g., 「あわててしまいました」
- b-ii. [不都合・反期待] 不都合なこと、期待に反したことが行なわれることをあらわす。 e.g., 「黒板ふきが、とんでしまいました」
- (9) 寺村(1984: 152ff) 基本的に、行為・動作、できごとが完了したことを特に強調する表現である
- a. [完了の強調] 終わったことに対する話し手の心理的反応を表わす
e.g., 客観的終了をあらわす「書キオワル」「書キオエル」に対して「書イテシマウ」は心理的反応を表わす
- b. [悲しみや後悔] 瞬間動詞に付く場合、「その事が起こって、もはや起こる前の状態に戻ることはできない」という心理を表わす
e.g., 「永い交際も終わってしまった」
- c. [実現] 意向表明や勧誘の「シヨウ」や、命令形になると、「完了の強調」は、早く、ただちに、そのことを実現させよう、実現しろ、という意味になる e.g., 「暗クナラナイウチニ、ヤッテシマオウ」

- (10) 杉本(1991: 109-110)
 - a. [完結相] アスペクト的意味 e.g., 「その本を読んでしまった」
 - b. [実現相] モダリティー的意味 e.g., 「太郎は死んでしまった」
- (11) 金水(2000: 67-68) [限界達成の前景化] 「りんごを一度に5個食べた」という限界達成に対して「りんごを一度に5個食べてしまった」は限界達成が前景化されている
- (12) 梁井(2009: 15-16) 「広義の〈完了〉」
 - a. [完遂] 動的に展開し時間的な幅1をもつ事態の終わりの局面を捉える e.g., 「おやつを食べてしまっからにきなさい」
 - b. [実現] それ以外 e.g., 「一日中歩き続けたから疲れてしまった」

1.2. 構成性の問題

自然言語をメタ言語として用いる分析の潜在的な問題の第2は構成性に基づく理論の予測が難しい点である。

1.2.1. 先行する述語の語彙アスペクトとテシマウの意味

先行研究で言う「実現」とはいったい何なのか。

- (7) 高橋(1969/1976: 131)
 - a. [終了] 「電燈がみんなきえてしまった」
 - b. [実現] 「たいがいは死んでしまう」
- (9) 寺村(1984: 152ff)
 - a. [完了の強調] 「書イテシマウ」
 - c. [実現] 「暗クナラナイウチニ、ヤッテシマオウ」
- (13) 杉本(1991: 109-110)
 - a. [完結相] 「その本を読んでしまった」
 - b. [実現相] 「太郎は死んでしまった」
- (14) 梁井(2009: 15-16) 「広義の〈完了〉」
 - a. [完遂] 「おやつを食べてしまっからにきなさい」
 - b. [実現] 「一日中歩き続けたから疲れてしまった」
- (15) 「又「終結態はある動作・作用が完全に行われることを表わす態である」といった。「ある動作・作用が」という以上は、終結態をとり得る動詞は、状態を表わす動詞ではなくて、動作・作用を表わす動詞でなければならない。又「完全に行われる」という以上は、その動作・作用はある時間の間継続するものでなければならない。即ち、終結態をとり得るのは、継続動詞に限るはずであって、瞬間動詞には終結態はないはずである」 (金田一(1955/1976: 49))
- (16) 「ところで「瞬間動詞には終結態がない」と言って来ると、問題になるのは、瞬間動詞にも「てしまう」がつくではないか、ということである。例えば「死んでしまう」などがこれである。然し、今、この意味をよく考えて見ると、これは継続動詞についての「てしまう」と同じものではない。[...]これは「その動作・作用がかりそめでなく本当に行われる」ということ、つまり「その動作・作用が実現する」ということを表わしているのである。「本当に行われる」という意味であるから、裏には「もとに戻る望みはない」とか「残念だ」とかいう意味が宿ることが多い」 (金田一(1955/1976: 49))

1.2.2. 後続する形態素とテシマウの意味

テシマウの接尾辞要素の意味論がテシマウの分析に混入する例

(9) 寺村(1984: 152ff)

- c. [実現] 意向表明や勧誘の「ショウ」や、命令形になると、「完了の強調」は、早く、ただちに、そのことを実現させよう、実現しろ、という意味になる e.g., 「暗クナラナイウチニ、ヤッテシマウ」

(7) 高橋(1969/1976: 131)

- a. [終了] うごきがおわりまでおこなわれることをあらわす e.g., 「電燈がみんなきえてしまった」

金田一(1955/1976), 金水(2000)はテシマウの意味論とテンスの区別に意識である。

- (6) 「終結態は、上に述べたように「する」の一種である。つまり動作・作用を表わす語句である。動作・作用を表わす語句であるから、§2に述べたように、過去態とか現在態とかいう別はないわけである。その代りに、§4に述べたように、完了態・不完了態の別があるわけである。例えば、「消えてしまう」「読んでしまう」は不完了の終結態であり、「消えてしまった」「読んでしまった」は完了の終結態である」 (金田一(1955/1976: 29-30); 太字も金田一のもの)
- (17) 「シテシマウ (シテシマッタ) を時間性の面から見ると、スル (シタ) と基本的に変わりがない。例えば、「食べてしまった」で表される時間的意味のうち、「食べた」で言い表せない意味はないのである」 (金水(2000: 67))
- (18) a. 田中さんは夕食を作っている。(進行)
b. 田中さんは夕食を作ってしまった。(完了) (金水(2000: 67-68))

2. 形式言語を使った分析

テンスマーカーが-ta ではなく-ru であるなかで、結婚という事態が発話時から見て完了しているのは(19b)のみであることを説明しなければならない。

- (19) a. ユイは結婚する *kekonsu-ru*
b. ユイは結婚している *kekonsi-te i-ru*
c. ユイは結婚してしまう *kekonsi-te simaw-u*

形態素の構成性に注目すると、(19b)の完了性を Reichenbach (1947)流に分解すれば、参照点(現在)を導入するのは-ru である。では完結性がどこに起因するかというと、非過去の-ru や状態述語の i(-ru)ではないことは明らかなので、-te が先行性・完結性をもたらすと考えざるを得ない(松尾(1936), 吉川(1977), Kuno (1973), Nakatani (2003, 2013); cf. also Ogihara (1996))。

- (20) a. $[-te] = \lambda P, e_1, e_2 [e_1 < e_2 \ \& \ P(e_1)]$
($e_1 < e_2 := t(e_1) < t(e_2)$; $t(e)$ maps e onto the whole interval in which e holds.)
- b. $[-ta] = \lambda P, e [e < s^* \ \& \ P(e)]$
($s^* = \text{speech time}$)
- c. $[-ru] = \lambda P, e [s^* \leq e \ \& \ P(e)]$
(if e is a state, $s^* \leq e \models s^* \subset t(e)$; otherwise, $s^* \leq e \models s^* < t(e)$)

(21) $\llbracket \text{kekconsu} \rrbracket = \lambda y, x, e \exists e' [\text{INIT}(e, e') \ \& \ \text{married}(e', x, y)]$
 (where $\forall e, e' [\text{INIT}(e, e') \rightarrow e$ is the initial smallest moment of e']) (cf. Dowty (1979))

(22) a. $\llbracket \text{yui-wa kekconsu} \rrbracket$
 $= \lambda y, e, \exists e' [\text{INIT}(e, e') \ \& \ \text{married}(e', Yui, y)]$

b. $\llbracket [\text{yui-wa kekconsu}]\text{-ru} \rrbracket$
 $= \lambda P, e [s^* \leq e \ \& \ P(e)] (\lambda y, e \exists e' [\text{INIT}(e, e') \ \& \ \text{married}(e', Yui, y)])$
 $= \lambda y, e \exists e' [s^* \leq e \ \& \ \text{INIT}(e, e') \ \& \ \text{married}(e', Yui, y)]$
 $= \exists y, e, e' [s^* < e \ \& \ \text{INIT}(e, e') \ \& \ \text{married}(e', Yui, y)]$

(23) $\llbracket [\text{yui-wa kekconsi}]\text{-ta} \rrbracket$
 $= \exists y, e, e' [e < s^* \ \& \ \text{INIT}(e, e') \ \& \ \text{married}(e', Yui, y)]$

(24) $\llbracket [\text{kekconsi}]\text{-te} \rrbracket$
 $= \lambda y, x, e_1, e_2 \exists e_1' [e_1 < e_2 \ \& \ \text{INIT}(e_1, e_1') \ \& \ \text{married}(e_1', x, y)]$

(25) $\llbracket \text{i} \rrbracket = \lambda x, e [\text{exist}(e, x)]$

(26) teP adjunction
 $\llbracket \text{teP V} \rrbracket = \lambda x, e_2 \exists e_1 [\llbracket \text{teP} \rrbracket (e_1)(e_2)(x) \ \& \ \llbracket \text{V} \rrbracket (e_2)(x)]$

(27) a. $\llbracket [\text{kekconsi-te} \ \text{i}] \rrbracket$
 $= \lambda x, y, e_2 \exists e_1, e_1' [e_1 < e_2 \ \& \ \text{INIT}(e_1, e_1') \ \& \ \text{married}(e_1', x, y) \ \& \ \text{exist}(e_2, x)]$

b. $\llbracket \text{Yui-wa} [\text{kekconsi-te} \ \text{i}] \rrbracket$
 $= \lambda y, e_2 \exists e_1, e_1' [e_1 < e_2 \ \& \ \text{INIT}(e_1, e_1') \ \& \ \text{married}(e_1', Yui, y) \ \& \ \text{exist}(e_2, Yui)]$

c. $\llbracket [\text{Yui-wa kekconsi-te} \ \text{i}]\text{-ru} \rrbracket$
 $= \lambda y, e_2 \exists e_1, e_1' [s^* \leq e_2 \ \& \ e_1 < e_2 \ \& \ \text{INIT}(e_1, e_1') \ \& \ \text{married}(e_1', Yui, y) \ \& \ \text{exist}(e_2, Yui)]$
 $= \exists y, e_2, e_1, e_1' [s^* \subset \tau(e_2) \ \& \ e_1 < e_2 \ \& \ \text{INIT}(e_1, e_1') \ \& \ \text{married}(e_1', Yui, y) \ \& \ \text{exist}(e_2, Yui)]$

$s^* \leq e_2$ については、 e_2 が状態事象なので、(20c)に従い同時解釈 (e_2 が成り立つ時間区間に発話時が含まれるという解釈¹⁾) となる。

simaw については本動詞の simaw の意味論を反映しているという直感に従い、「(物を箱に) しまう」の隠喩的拡張と考える (寺村(1984), Ono (1991), 梁井(2009), Nakatani (2013)など)。また、補助動詞化した動詞はしばしば (1) 動作主事象が抑制され、(2) 主題が事象化される。(2)について、Nakatani (2013: 194ff)

¹ これを文字通り取ると、ユイが存在する前 (生まれる前?) に結婚事象が起こらなければならない。Nakatani (2013: 234ff)では、複雑述語形成に意味的な連結操作が含まれていることが主張されており、この例で言えば、結婚事象と存在事象が独立事象として理解されるのではなく、意味連結によって関連事象として解釈されることが生成レキシコンの枠組みで仮定されている。別の言い方をすれば、 $\text{exist}(e_2, Yui)$ の e_2 が married によっても特徴づけられると仮定できる ($\text{exist}(e_2, Yui) \ \& \ \text{married}(e_2, Yui)$)。

に従い、共時的な過程として「主題の事象化 theme eventification」と呼び、テ形補助動詞において移動対象たる主題を物体から共起する先行事象 e の発展的ステージ(Landman (1992))に置き換える過程を仮定する。「ある事象の発展的ステージ」がどのようなものとして解釈されるかは事象のアスペクト特性に左右され、典型的には結果状態が選ばれる。 e の発展的ステージ事象を $\text{stretch}(e)$ と置く。

-te V を再構造化 (restructuring)された補助動詞表現と考え(cf. McCawley and Momoi (1986), Miyagawa (1987))、先行する動詞句をその項と分析する。

$$(28) \quad \llbracket \text{te-V} \rrbracket = \lambda P, e \exists e_1, e_2 [[e e_1 < e_2] \& P(e_1) \& \llbracket V \rrbracket(e_1)(e_2)]$$

$$(29) \quad \llbracket \text{-te simaw} \rrbracket$$

$$= \lambda P, e \exists e_1, e_2, e_2', z [[e e_1 < e_2] \& P(e_1) \& \text{INIT}(e_2, e_2') \& \text{BOX}(z) \& \text{in}'(e_2', \text{stretch}(e_1), z)]$$

(where $\text{BOX}(z) = 1$ iff z is a metaphorically closed, inaccessible space; $[e e_1 < e_2]$ represents the internal structure of e such that it is constituted by e_1 and e_2 with e_1 preceding e_2 (cf. Pustejovsky (1995: 69ff)))

$$(30) \text{ a. } \llbracket \text{Yui-wa kekkonsu} \rrbracket$$

$$= \lambda e_1, \exists e_1', y [\text{INIT}(e_1, e_1') \& \text{married}'(e_1', \text{Yui}, y)]$$

$$\text{ b. } \llbracket \text{Yui-wa kekkonsi-te simaw} \rrbracket$$

$$= \llbracket \text{-te simaw} \rrbracket(\llbracket \text{Yui-wa kekkonsu} \rrbracket)$$

$$= \lambda P, e \exists e_1, e_2, e_2', z [[e e_1 < e_2] \& P(e_1) \& \text{INIT}(e_2, e_2') \& \text{BOX}(z) \& \text{in}'(e_2', \text{stretch}(e_1), z)] (\lambda e_1, \exists e_1', y [\text{INIT}(e_1, e_1') \& \text{married}'(e_1', \text{Yui}, y)])$$

$$= \lambda e \exists e_1, e_1', e_2, e_2', y, z [[e e_1 < e_2] \& \text{INIT}(e_1, e_1') \& \text{married}'(e_1', \text{Yui}, y) \& \text{INIT}(e_2, e_2') \& \text{BOX}(z) \& \text{in}'(e_2', \text{stretch}(e_1), z)]$$

$$\text{ c. } \llbracket \text{Yui-wa kekkonsi-te simaw-u} \rrbracket$$

$$= \llbracket \text{-ru} \rrbracket(\llbracket \text{Yui-wa kekkonsi-te simaw} \rrbracket)$$

$$= \lambda P, e [s^* \leq e \& P(e)] (\lambda e \exists e_1, e_1', e_2, e_2', y, z [[e e_1 < e_2] \& \text{INIT}(e_1, e_1') \& \text{married}'(e_1', \text{Yui}, y) \& \text{INIT}(e_2, e_2') \& \text{BOX}(z) \& \text{in}'(e_2', \text{stretch}(e_1), z)])$$

$$= \lambda e \exists e_1, e_1', e_2, e_2', y, z [[e e_1 < e_2] \& s^* \leq e \& \text{INIT}(e_1, e_1') \& \text{married}'(e_1', \text{Yui}, y) \& \text{INIT}(e_2, e_2') \& \text{BOX}(z) \& \text{in}'(e_2', \text{stretch}(e_1), z)]$$

$$= \exists e, e_1, e_1', e_2, e_2', y, z [[e e_1 < e_2] \& s^* < e \& \text{INIT}(e_1, e_1') \& \text{married}'(e_1', \text{Yui}, y) \& \text{INIT}(e_2, e_2') \& \text{BOX}(z) \& \text{in}'(e_2', \text{stretch}(e_1), z)]$$

本研究で提唱する分析の肝は、-te simaw の完結的な特性を、事象が BOX に入るという語彙意味論的構造として捉えた点にある。すなわち、-te simaw はアスペクトをマーキングする文法標識というよりは、本動詞のフレーバーを多分に残した広い意味での内容語であるという分析である (→金田一(1955/1976)の主眼)。内容語であるからして、-te i にも-te simaw にも語彙アスペクトが付随しており、その違いが、-te i-ru の完了解釈と、-te simaw-u の未完了解釈の違いに結びつくとした。すなわち、-te i は状態述語、-te simaw は到達述語であるという違いがあるため、非過去-ru と組み合わせたときに時制的な解釈の違いが生まれるのである。金水(2000)の(18)の対立もこのラインから説明される。

縮約形-tyaw について

梁井(2009)や張(2011)が観察するように、チャウの用法にはテシマウで代替することが難しい、あるいはニュアンスがかなり異なる例があり、同じ意味であると考えすることは難しい。

- (31) a. バーキンのバッグ、買っちゃった。
b. バーキンのバッグ、買ってしまった。
- (32) a. 雰囲気飲まれちゃった。
b. 雰囲気飲まれてしまった。
- (33) a. もう行っちゃおうよ！ (→早くしないと、置いていくよ！/置いていかれるよ！)
b. もう行ってしまおうよ！ (→早くしないと、#置いていくよ！/置いていかれるよ！)

語彙意味論的分析で-te simaw と-tyaw の違いはおおよそとらえることができる。

- (34) $[-\text{tyaw}] = \lambda P, e \exists e_1, e_2, e_2', z [[e e_1 < e_2] \& P'(e_1) \& \text{INIT}(e_2, e_2') \& \text{TOYBOX}(z) \& \text{in}'(e_2', \text{stretch}(e_1), z)]$
(where $\text{TOYBOX}(z) = 1$ iff z is a metaphorically closed space that may not be completely inaccessible, or may even easily get opened if the agent wants to)

参考文献

- 張又華 (2011) 「主観的・間主観的意味の発生をめぐって: 日本語アスペクト形式「テシマウ」「チャウ」を例に」『言語科学論集 (京都大学)』17, 131-142.
- de Swart, Henriëtte (1998) *Natural Language Semantics*, CSLI Publications, Stanford, CA.
- Dowty, David (1979) *Word Meaning and Montague Grammar*, Reidel, Dordrecht.
- Heim, Irene R. (1982) *The Semantics of Definite and Indefinite Noun Phrases*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Heine, Bernd. (1993) *Auxiliaries: Cognitive Forces and Grammaticalization*, Oxford University Press, Oxford.
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』15, 48-63. (金田一春彦(編)(1976)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房, 東京 所収)
- 金田一春彦 (1955) 「日本語動詞のテンスとアスペクト」『名古屋大学文学部研究論集』10, 63-90. (金田一(編)(1976)所収)
- 金水敏 (2000) 「時の表現」『日本語の文法2 時・否定と取り立て』, 金水敏・工藤真由美・沼田善子(著), 3-92, 岩波書店, 東京.
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Landman, Fred (1992) “The Progressive,” *Natural Language Semantics* 1, 1-32.
- Martin, Samuel E. (1975) *A Reference Grammar of Japanese*, Yale University Press, New Haven, CT.
- 松尾捨治郎 (1936) 『国語法論攷』文学社, 東京.
- McCawley, James D. and Katsuhiko Momoi (1986) “The Constituent Structure of -te Complements,” *Papers in Japanese Linguistics* 11, 1-60.
- Miyagawa, Shigeru (1987) “Restructuring in Japanese,” *Issues in Japanese Linguistics*, ed. by Takashi Imai and Mamoru Saito, 273-300, Foris, Dordrecht.
- Nakatani, Kentaro (2003). “Analyzing -te,” *Japanese/Korean Linguistics 12*, ed. by William McClure, CSLI Publications, Stanford, CA
- Nakatani, Kentaro (2013) *Predicate Concatenation: A Study of the V-te V Predicate in Japanese*, Kurosio Publishers, Tokyo.
- Ogihara, Toshiyuki (1996) *Tense, Attitudes, and Scope*, Kluwer, Dordrecht.
- Ono, Tsuyoshi (1991) “The Grammaticization of the Japanese Verbs *oku* and *shimau*,” *Cognitive Linguistics* 3, 367-390.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Pustejovsky, James (2000) “Events and the Semantics of Opposition,” *Event as Grammatical Objects: the Converging Perspectives of Lexical Semantics and Syntax*, ed. by Carol Tenny and James Pustejovsky, 445-482, CSLI Publications, Stanford, CA.
- Reichenbach, Hans (1947) *Elements of Symbolic Logic*, University of California Press, Berkeley, CA.
- 杉本武 (1991) 「「てしまう」におけるアスペクトとモダリティ」『九州工業大学情報工学部紀要 (人文・社会科学篇)』4, 109-126.
- 高橋太郎 (1969) 「すがたともくろみ」『教育科学研究会国語部会文法講座テキスト』(金田一(編)(1976) 所収)
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版, 東京.
- 梁井久江 (2009) 「テシマウ相当形式の意味機能拡張」『日本語の研究』5, 15-29.
- 吉川武時 (1973) 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」『Linguistic Communications (Monash University)』9. (金田一(編)(1976) 所収)
- Vendler, Zeno (1957) “Verbs and Times,” *The Philosophical Review* 66, 143-160.